

## 加賀友禪

加賀友禪は、手描きの絵柄と独特の五色の色彩で、絹の上に鮮やかで写実的な自然の情景を描写する、何世紀にもわたる伝統的な絹織物染めである。京都の京友禪、東京の江戸友禪と並び、日本三大染色のひとつに数えられている。現在、加賀友禪の技術は、バッグやスカーフなどの小物の装飾や、石川県の高級着物である加賀友禪の制作に用いられている。

16世紀、加賀藩（現在の石川県の地域）は絹織物の名産地であった。18世紀初頭、有名な絹の扇絵師である宮崎友禪（?-1758）は、加賀藩に画期的な染織技術をもたらした。彼の複雑なレジスト染色法は、手描きによる複雑な絵柄を可能にし、さらに水溶性の糊で染料を吸収させないようにすることで、色とりどりの精巧なデザインを可能にした。この技法は、現在も加賀友禪の基本となっている。

加賀友禪は、虫にかじられた葉や朽ちた葉など、自然をリアルに表現することで知られてる。これは「虫喰い」と呼ばれ、自然のはかなさを表現している。また、加賀友禪のデザインは、京友禪のような金銀の華やかな装飾を避ける傾向にある。江戸友禪が落ち着いた色調であるのに対し、加賀友禪は藍、深紅、黄土、深緑、古代紫の5色の「加賀五彩」と呼ばれる色彩が用いられている。

友禪染は1955年に重要無形文化財に指定され、1955年に木村雨山（1891-1977）、2010年に二塚長生（1946-）の2人の石川県民が友禪の技術保持者となっている。